

---

# 撃ち抜いたのは

歌瑞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

撃ち抜いたのは

### 【Nコード】

N7272U

### 【作者名】

歌瑞

### 【あらすじ】

ちまい娘と職業軍人、狙って撃ち抜いたのは アレ、どっちだったっけ？

そんなラブっぽいような気がするおはなし。

## 1 (前書き)

舞台は現代社会と似ているようなそうでないような別の世界、フィクションですので多少のおかしなところは心の中でそっと突っ込み入れつつ気になさらないようお願いいたします。

トス、という軽い音と衝撃を、右の鎖骨の下あたりに感じてそこに視線を落とすと、黄色いピンが身体にくっついてた。

ああ、麻酔弾ってプラスチックのガビヨウをおっきくしたみたいなカタチなんだー、へー、はじめてみた、とか、なるほど被弾した人たちがホントに撃たれたみたいに手や足を引きずったりしているのは麻痺で動かなくなるからなんだなあ、肩がうごかなくなってきた、とか、そんなことをつらつらと考えつつ。

初めてのゲームはあっけなく撃たれておわった。

もともと自分から参加したいと思ってやりに来たゲームではなかったので、麻酔弾とはいえ実際に撃つと弾がとぶのに、それを他人にむけるのは抵抗があった。

ほかの皆みたいにパンパン撃ちあう気になれずに逃げて隠れてやりすぎず、ずっとそうしてたけど、生き残りがだんだんと少なくなるにつれてそうもいかなくなってきた。

隠れててもゲームはおわらないのだ、ゴールしなきゃ。

そう思っって恐る恐る顔を出し、足が滑って埋まって走りにくい雪のフィールドを必死に駆けだしてすぐに、わたしは撃たれてしまったのだった。

こっちは撃たなかったのに、くっそー！

もう、怖がって気を使って遠慮して撃ちたくないなんて思ってた自分がバカみたいだと思ったから、次のゲームでは撃たれる前に撃ってやるう、と考えた。

最初はやっぱり逃げて隠れてやりすごしてたけど。

ずいぶんと人が減ってきてしまったので、そろそろ自分も動かないことにはゲームがおわらない。

ごくりと唾を飲み込むと、わたしはやっぱり今日も滑って埋まって走りにくい雪のフィールドを駆けだした。

すぐさま背後からジャキンっていう弾を装填する音が響いた  
負つけるもんかああ  
！

わたしのライフルは装填済み、くるりと振り向くと遠い高台に人影、寒冷地仕様のふかふかであったかそうなファーがついた帽子と軍人コート、日除けの黒いゴーグル。至極自然に慣れた様子でライフルを構えようとしている　ゆっくりと首を傾けスコープをのぞく泰然とした動作が余裕綽々で小憎らしい。ならない。

わたしはまったくもって使い慣れないライフルを慌てて構え、照準なんてすっかり狙ってたら向こうが撃つほうが早いに決まってるからと、ろくすっぽ狙いもせず引金を引いた。

反動に備えてなかったものだから、たやすく重心の崩れた身体がつるつと足を滑らせてコケかけたけど、それよりも衝撃だったのは高台の軍人さんががっくりと膝をついてその場で前のめりになったことだった。

あ、当たっちゃった!?

当たるとは思ってなかったけど当てる気で撃っちゃった身として

はもうなんていうか

ジャキンっ。

また高台から装填音、今度はさっきよりわたしに近い位置から

う、撃たれるうううう!!

恐慌をきたしたわたしはくるつと方向転換、逃げ出した。

「ごめんなさああああいいいいいい!!」

そう捨て台詞を残して。

ピッ。

左耳に、通話が入った事を知らせる電子音。

『ダアーイ』

dieねはいはい撃たれましたよ。

くつくつく、と喉を鳴らす同僚の笑い声もきつちり

伝わってくる。

死亡判定をガイドにもらったのは久々だ。油断した。

どう見たって素人で、もたもた走る姿からも運動神

経のニブさがわかる小娘相手に。

チクシヨウ。

決起した二度目のゲームも、一人倒したその後、やっぱりあっけなく撃たれておわった。

三度目の今日は、一度目よりもアタフタしてる。人を撃ってしまった、罪悪感を覚えてしまったから。でも撃たれて悔しい思いも覚えてる。

どうしようどうしよう、どうしよう　正直、それで頭がいっぱいだった。

だからまた逃げて隠れてやりすごして、やっぱり生き残りが少なくなってきたので仕方なく駆け出して。

背後で響く装填音に振り向いて        どうしよう。  
かたまってしまった。

衝撃を感じたのはすぐだった。

息が詰まった。

喉に手をやって、そこに麻醉弾が刺さってるのを感じて、引き抜いた。針が抜けてく感覚が奇妙だった。

息が

麻醉で、息が。

麻痺するっていつても、完全に動かなくなるわけじゃない。でも雪の上を必死で駆けてはあはあしてたわたしは、喉のどまんなかで効果を発揮してくれた麻醉弾のおかげで、軽い酸欠になったみたいだった。

みたいってというのは、気が付いたら積もった雪に頭をくつつけてぎこちない呼吸をしてたから。

ああ、冷たい雪が気持ちいいかも。そう思って開き直って、強張ってた身体から力をぬいて遠慮なく雪にほつぺたをすりすりしてたら、ざくざくと雪を踏む足音が近づいてきた。

「大丈夫か」

ああ、安全と判定のためにあちこちに配置されてるガイドさんだ。たぶん。

声の主を確認するために身体を動かすのも億劫だったので、わたしは雪に顔を埋めたままこっくりとうなずいた。喉がちつとも思い通りに空気を通してくれないから、喋るのがめんどくさい。

「気分は」  
平気ですー。

心の中でそう答えるけど、それがガイドさんに聞こえるわけはない。わたしの肩をつかんでうつぶせの身体をひっくり返そうとする力が加わったのを感じて、それを制するために自分から身体を起こした。

それでも座り込んだまま、雪に両手をついて切れ切れに呼吸するわたしに、ガイドさんは重ねて問いを投げてきた。

「気分は悪いか」  
いいえ。

ふるふると首を横にふる。そうしているうちに、またもぞくぞくと、今度はずいぶんと早い勢いで足音が近づいてきた。

「大丈夫!？」  
女の人だった。

たぶん医療系のサポートをしている人なのだろう、左の二の腕に赤い十字がプリントされた腕章をはめている。

彼女はわたしの喉を見るなりカツと眉をはねあげた。

「もう、何考えてるの!？」

憤りの相手はわたしでなくて他の人らしい　と気が付いたのは、彼女に簡単な手当てを施されて、腕をぎゅっと支えられて歩き始めた後だった。

もうだいぶ呼吸は落ち着いてきていたけれど、ちゃんと手当てをしないとね、と言われて医務室へ連行されている。

「痛みは？気分は悪くなったりしていない？」

「だい…」

じょうぶです、と言おうとしたけれど、しゃがれた自分の声にびっくりして止まってしまった。ひどい声だ。

「ああ、無理に喋らなくていいからね。まったくもう、こどもじゃないんだから！」

わたしの腕をしつかり捕まえて隣を歩く女性は、ここにいない誰かにずつとぶりぶり怒りを向けている。怒りながら、わたしの喉の異常は麻酔が切れれば治るだろうと言ってくれた。でも雑菌が入るといけないからと、消毒して、絆創膏を貼られると、ようやっとわたしは解放されて、帰れることになった。

ふう。

やっぱりこのゲームは向いてない。今回のことでそれが周囲にもわかっただろうから、次からは断ることもできるだろう。そう考えればまあ、良い。

喉にまだ残る違和感をそれで気にしないことにして、多少無理やりに気分を上向き修正しよう。

撃ってしまったときのこと、撃たれたときのことを突き詰めて考えてしまうと、どうにも嫌な方向に思考がおちて行きそうな予感がそれはもうとつてもするので、すっかりさっぱり忘れてしまえばいい。

そう思って、てくてくと家路を歩き出した。

## 1 (後書き)

軍営業娯楽施設とか対人間用麻酔弾とか個人情報管理うんたらとか  
フィクションですから生暖かく笑ってスルーをお願いいたします。  
全力で。

そもそもネタが夢で見たものなので設定破綻気味あああ。  
ごめんなさい。

## 2 (前書き)

ハンターさん視点になります。

『もう、何考えてるの!?!』

左耳から響くキンキンした声に顔を顰めつつ、片手で己の顔を覆った。全く持って面目無え。

ちよつとした意趣返しのもりだった。

前回俺を『KILL』した小娘が、前回と同じようにもたもたと物陰から走り出したのを見つけて、今度はそうはいかせねえ、俺の実力を小娘にみせてやろうと、マジになったのが馬鹿だった。

ビギナーズラック、まぐれ当たり。前回のヒットはそんなもん。俺も同僚のヤツらもわかった。

でもその日の酒の肴に一晩中からかわれて、少々恨んでたわけだ。この俺が、よりもよつてあんなトロそうな小娘にしてやられたなんて。ああ、これも言い訳にしかならねえな、情けねえ。

『痛みは?気分は悪くなったりしていない?』

『だい...』

答える声はそこで止まった。か細くてひどくかすれている。左耳に入れた軍支給の高性能な通信機は、苦しげな呼吸音もご丁寧に拾ってくれる。

『ああ、無理に喋らなくていいからね。まったくもう、こどもじやないんだから!』

面目無え。

マジになって狙った俺の弾は、振り向いた小娘の急所へ精確に届いた。

撃ち漏らすまいと小娘の一挙手一頭足に神経を巡らせて見ていたから、小娘が迷いと動揺を抱えていて撃つ気がまったくなかったのにも気が付いた。もう引き金を引いちゃった後だったが。

後悔先に立たず。

前回はアホみたいな幸運でコケて俺の弾を避けてたが、今、凍りついたように固まってる獲物に俺の狙いは正確すぎた。

見事に急所ど真ん中。

凍りついた表情のままかっくりと膝をついて、喉に手をやると、抜いた麻醉弾を不思議そうに見つめ　そのままうつ伏せに倒れた。

ざつと背筋が冷えた。

麻醉というものは一歩間違えれば死の危険もある。それほど強いものはこのゲームに使用されていないが、麻醉の取り扱いに慎重さが必要なのは周知のこと。

安全性は保障されてる麻醉弾ではあるが、当たり所が悪ければ失明の危険だってある。だからこのゲームはゴーグルが必須、そういうルールだ。ある程度の危険が予想されてる、大人の遊び。

危険が予想される。それを配慮しカバーするために、軍の中でも射撃能力に突出したものがハンターをやっているのだ。

うっかり危険な部位に弾が当たる事故がないよう手や足を狙って無力化するのが当たり前、そういう仕事だ。軍事訓練じゃねえ、ま

してや実戦、任務なんかでもねえ。素人相手に本気を出してどうする。

シフトが回ってきて、つまんねえ仕事だと文句を垂れてたガイド役のジェイクが小娘の安否確認に向かうのを、アホみたいに突っ立って見てた。

俺より体格がひとまわりほど小柄なジェイクと比較して、小娘はさらに輪をかけてちまっこい。

ジェイクが肩に触れるとむっくり起きあがる。意識はあるらしい。ほっとした。

救命キットを片手に小娘に駆け寄ったアーリからとんでくる怒りの通信が耳に痛い。いろんな意味で。

「面目無え…」

『どこ撃たれたの？ 喉？ 喉ですって！？』

がさがさがちやがちやとせわしない音をマイクが拾っている。遠目にアーリが酸素を吸引させているのも見える。

『ああ、声帯まで麻痺してるのね…こんなに首の細い子なんて事を！ 鍛えまくってる筋肉馬鹿どもとはわけが違ふことくらいわかるでしょうに！』

申し訳ありません。

『アレルギーは無いってゲーム登録時に確認してあるわよね？ 風邪薬や頭痛薬が効きすぎたり副作用が出たりする？ …そう、薬物に弱い体質なのね』

身体が小さい。麻酔の効きは他より強いだろう。それくらい分かって当たり前のことだった。薬にも弱いだった？

本格的に凹んだ。俺は馬鹿か。

アーリに付き添われて小娘は退場。気が付けばゲームも逃亡成功者無しで終了していた。

一仕事終えたチームの連中から引つ切り無しに通信が入る。

『なんか騒ぎがあつたつて聞いたけどー、何ー？ また殺されてんのー？』

『やりすぎだろバーカ』

『はっはっはっはっは、はっはっはっはっはっは』

『アーリが御冠だぞ、何したんだか知らねえが恐えからさっさと殴られてこいよ周りが迷惑だ』

『責様は国民を守護する軍人としての自覚が無いのか。護るべき者を傷つけるなど言語道断、恥を知れ』

『き、聞いたぜ、お、おま、お前…ぷっ』

ムカつく。

正直そう思ったが、反論もできなかった。

とにかく俺のやったことはアホすぎた。ヤツらに馬鹿にされても甘んじて受けよう。

そんなことよりも、とつと小娘に謝罪しなければおさまらない。今回のゲーム参加者の名簿を確認するべく、俺は事務室へ急いだ。

## 2 (後書き)

かさねて申しますが軍経営娯楽施設とか対人間用麻酔弾とか個人情報管理うんたらとかフィクションですので生暖かく笑ってスルーをおねがしいたしますです、はい。

ここまで投稿しといてアレなんですが軍人と小娘の名前がいまだに決まってなくて詰まりました。どうしよう。

|||||とかのまま投稿したらダメですよねウフフどうし  
よう。

帰り道をてくてく歩いて。

おなかすいたなー、晩御飯何にしようかなあ、とか考えながらふと前をみると、歩道にぴったりと寄せられた車が目にはいった。

車には全く興味がないので車種とかはよくわからないけど、車高がすごく低くて、銀色の、なめらかな流線型のフォルムをしている。いわゆる『走り屋さん』の、お金のかった車だ、ということだけはわかる。

その高級そうな車によりかかる人影があった。

車の反対側は高い壁があって、その人がいると歩道がずいぶんと狭まっているように見える。近づくにつれ、人影の輪郭がはっきりしてきて、かなりの身長と体格の持ち主なのがわかってくると、心理的にもなおさらに、だった。

やだなあ、柄の悪いヒトじゃないといいけど…

心持ち緊張しつつ、うつかり目をあわさないように俯いて、はやく通り過ぎてしまおうと足を速めた。

「なあ、あんた」

つぶつくつ。

ほぼ真横に並んだ一瞬に、やつぱりかなりの身長だったその人のものらしき声が入り降ってきたのだ。

イヤきつとわたしのことじゃないようん。携帯で電話してるに違いない！

聞こえなかったふりをして、てくてく歩く

「ミハル・クラタ、だろ？」

背後からバリトンボイスでずきゅーん、って心臓を撃ち抜かれた気がした。

え、なんでわたしの名前、フルネームで…知ってる、の？

思わず止まってしまった両足。これは無視するわけにはいかなかった、よ、ね…

恐る恐る、振り返って。

意図的に逸らして見ないようにしてた視線を、俯いたままその人の足元に持っていった。

ブーツ。雪深いこの土地にあわせた実用的な。

その先はダークグレーのロングコートに隠れていて、それをたどって見上げた先は。

飴のような、蜂蜜のような、深みのある金色の髪。今まで逆光でよく見えてなかったけど、夕暮れの朱を混じえた光を受けて、硬質だけどどこかとろりとした輝きをはね返す。

その金色の前髪が、ミルクティ色をした、日に焼けた淡い褐色の肌の顔にけぶるようにかかっている。その奥の、ミントの葉っぱみたいな翠の瞳にぎよっとした。

ちょっと間近ではお目にかかった事のない美貌だったからだ。

吊り目気味で大きな瞳に、すっきりした鼻筋。くちびるは薄いけれどふっくらしている。パーツの一つ一つが綺麗で甘さを持っているけれど、彫りの深さと頬から顎、首筋にかけてのしっかりした骨格は男っぽい。

なにより、髪と同じ金の瞳が落とす翳りの下で、肉を喰らう獣を思わせる光を放つ翠の瞳が、男の色を強くしていた。

「え、と…?」

何の用だろう。

こんな綺麗な人、いままでの人生を何度思い返しても、関わり合いになつたことなんか一度だつてないはずだ。

「ああ、わかんねえよな」

その人は眉をちよつと下げ、くちびるを片側だけ歪めると、コートの胸ポケットからサングラスを取り出して掛けた。それから、右手を自分の右肩あたりに引き寄せ、首をことんとそこに傾けると、左の手のひらを上向ける。

「あ」

ライフルを持ったときの構えだ。

そうだ、あの時わたしを撃つた黒いゴーグルの軍人さんは、金髪だつたような気がする。

「『ハンター』さん…?」

「そう」

なるほどこの美形さんは、今日のゲームでハンターをやつてた軍人さんなのか。

「俺はルダー・スウィフト。アンタに詫び入れさせて欲しくて待つてたんだ」

そういつてサングラスを外したその人は、苦いような、ちよつぴり情けないような、そんな微妙な顔で淡く笑つた。

…、詫び?

名前と住所と電話番号。あと近くの大学の学生だったのもわかった。今日のゲームはそのサークルか何かの集まりでやってきたらしい。

大抵こういう遊びのあとはそのまま飲み会になだれ込むと思ってたんだが、どうやら彼女は手当てを受けている間に置いてかれたらしく、他の面子はとっとと行っちまったようだった。それは重畳、俺にとっては好都合。

一人になった彼女はおそらく電車を使うだろうと推測し、最寄り駅までの道のりで捕まえちまおうと車を走らせる。

まんまとちまっこい後姿を見つけて心の内でひとり喝采しつつ通り過ぎ、少し進んだところで歩道に寄せて車を止めると、外に出て彼女が追いついてくるのを待った。

当然といおうか、日も傾いて薄暗くなってきた人気の無い道端で、何をしてもなく突っ立ってる男がいたら、まず警戒するだろう。

こちらへ歩いてくる小さな人影が、俺の存在をみとめて微かに息を詰める気配を感じた。

まあ正しい判断だ。俺でも自分は怪しいと思う。

…あれ、ちよつと今俺ストーカーっぽくねえ？

脳裏にチラついたそれを察したみたいに、ぼてぼてと間延びしたような足音たてた歩調が、早くなった。…このやろう小娘め。鈍臭そうなくせに。

あからさまに視線を落として目を合わせまいとするしぐさに少しカチンときた。

「なあ、あんた」

歩みは止まらない。

シカトか！

絶対振り向かせてやるぞ小娘。

俺は声に意識して力を入れ、ちまい娘の名を呼んだ。

唐突に声をかけられて驚いている娘に『ハンター』の真似事をしてみせると、俺の素性にはいくらか納得したようだった。

それにしてもこのちまいの、さっきから目がまんまるで落ちそう  
だ。面白い。

噴出しそうになるのをどうにか噛み殺して、ちょっと話いいかとたたみかけて曖昧な了承をもぎ取り、寒いからとりあえず中へとエスコートの名をかぶせて背中を押しドアを開け無理矢理車内に詰め込み、何も告げずにキーを回して車をすべらせた。

そこまでできてようやく彼女は我にかえっただらしい。

後ろへ流れ始めた外の景色をはっと見遣ってドアに触れ、動揺をみせた。

「あ、あの、どこへ…」

トロい。

こんなに簡単に拉致られていいのか、危ねーな。

「ん、だから詫び。晩飯おごらせて？」

自分が今かなりワルイ大人なのは自覚の上で、最上級に爽やかに見えるようにつこり笑ってみせた。

気が付いたら助手席に座っていて、車はすでに走り出していて。窓の外に見えるものが慣れた視点よりさらに低い。足がシートからぼまっすぐに伸びてる。というか全身が伸びてる、なにこの身体の曲線にびったりフィットするリクライニングシート。こんな車に乗ったことない。

頭の中は状況についていけなくて緊張で固まっているのに、身体のほうは強制的にリラックス姿勢になっていて、そのギャップがザツと肌を粟立たせた。

わたし、いま、どうなってるの。  
どうなるの。

車なんて、ハンドルを握ってる人に自分の運命も握られてるようなものじゃないか　　行き先すらわたし、わかってない。  
怖くなって運転席に視線を移す。

「あ、あの、どこへ…」  
行くつもりなんですか、と投げようとした問いかけは、前方を見つめる精悍な横顔に思考を塗り替えられて、失速してしまった。  
無駄な動きなく周囲に視線を配って、ギアを手慣れたしぐさで入れ換え、ハンドルに片手の指を引っかけてくるりとまわすさまは優雅にさえ見える。

指のさきまで泰然とした空気をまとっていて、自信と余裕に満ちあふれた人に、わたしはいまさっき何を考えたんだっけ。  
ものすごく不遜なことだったような。

「ん、だから詫び。晩飯おごらせて？」  
やわらかく目を細めて、微笑まれる。翠の瞳からきらきらと星が散る、幻覚を見た気がした。

どうしよう。

こんな人の隣に乗ったことない。

錯綜するわたしの頭の中なんて知るよしもない彼は、スムーズに運転を続けながら少し思案するそぶりをみせた。

「駅から東、歩きなら…大体10分程度か。シイフアンて店があつてな。そこへ行こうかと思ってる」

「そ、うですか…」

駅の東、歩いて10分くらい。

うん、そのあたりはおいしいレストランがたくさん集まっている場所だ。知っている。

車が向かっている方角も間違つてない。

きちんと説明してくれてなんだかほつとした。

…

いやいや違う。

お詫びって、今日のゲームのことだよな、たぶん。酸欠でわたしが倒れたりしたから。

「あの、今日当たった弾のことなら、たいしたことないですよ」  
麻酔の効果はとつくに切れているし、普通に喋れる。

ちよつとしたアクシデントだったんだから、気に病むことなんてないのに。

「もう大丈夫です」

そう続けると、隣の人はちらりとこちらに視線を流してから、  
「そうか、良かった」

ちよっぴり笑んですぐに前方へ意識を戻し運転に集中、した。

……あああ違う！ 大丈夫だから奢ったりしなくていいのにつ  
て言いたいのに！

ホイホイ車に乗ってしまった現状ではとても言いにくい！

「あの、スウィ、フトさん」

舌を噛みそうになりながら呼びかけるも、車がカクリとちいさく  
揺れて、今まで感じていた慣性が逆向きになったことに気付いてし  
まった。

バックしている。

駐車スペースにはいろいろとしているうう。

「ハイ、到着」

…着いてしまいましたか。

ここまで来て断るのも逆に失礼な気もする。ごはん食べて、今日  
の気遣いにお礼を言って、ワリカンでお願いしよう。うん、そうし  
よう。あんまり高いお店じゃないといいな。

そんなことを考えていたら助手席のドアがぱかりと開いた。ガラ  
スの向こうでスウィフトさんが長身を屈めて車内を覗き込もうとし  
ている。

あああ、とろくさくてすいません！

今降ります！



#### 4 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。嬉しいです。

ミハルさんは基本臆病、とろくさい。

でも心のなかではたくさん喋っているのであんまり自分がとろいとは思っていなかったりします。ダメサレテルヨ！

エスコートされて入ったお店は、すいぶん懐かしい雰囲気の内装だった。

こちらの地方では『エキゾチック』と称されるだろうその造りは、わたしの故郷の建築を模したものだのだ。

木材を多分に使い、紙に似た材質のものを通した間接的な柔らかい照明は、ふるさと独特の暮らしを思い出す。

それっぽく真似たものだけれど、それでもちよっぴり浮き立った。こんなお店があつたなんて。

こちらのお席へどうぞ、とこれまた懐かしい民族衣装を身に着けたウエイトレスさんに案内されて、窓際のテーブルについた。

出窓に小さな盆栽風の鉢植えが置いてある。かわいい。

メニュースタンドにはおばあちゃんちにありそうな手毬の飾り。

そんなちよこちよこした小物のひとつひとつを見るだけで嬉しくなってきた。

懐かしい手触りの紙で出来たメニューにたくさん並ぶのは『お粥』『雑炊』の文字。

故郷のキレイな水の各土地名産の名前を冠した『ご飯』！

ごはん専門店！

子供の頃は毎日食べていたのに、最近あまり口にしていなかった。

テンションがもりもりうなぎ上りにあがっていつちやいそう、押さえなげや。

うきうきとはしゃいではめを外しそうになるのをどうにか堪えて、

わたしは自分が生まれた土地の名前が付いた雑炊を選んだ。  
オーダーを済ませたところで、正面に座ったスウィフトさんがす  
っと姿勢を正す。

「今日は悪かった。苦しかっただろう」

そういつて、彼は頭を下げた。

金色の髪がさらさらと零れ落ちて、その美貌を隠していく。

「うわああああ。まってまって、居たたまれない！」

「こんなにキレイで、端然とした人に頭を下げさせるとか！」

「お詫びとかそんなこと浮かれてすっかり忘れてた！」

「いえそんな、あの、いいんです！ わたしだって前回ハンターさ  
んに当てちゃったし……」

慌ててあのとときの事を思い出す。

配置が同じ場所だったから、きっとわたしが撃ったハンターさん  
は、この人だと思う。

「ああいこののだ。」

「ああ…あれは驚いたな、見事な狙いだったよ。心臓ド真ん中だ」  
スウィフトさんは苦笑って、指先で左胸のあたりを撫でた。そ  
こに弾があたったのだらうか。

彼は記憶をたどるように、ほんの少し遠い目をしてさすっている。  
「やっぱり、わたしが撃っちゃった人ってスウィ、フトさんだった  
んですね」

「だったらやっぱり、謝る必要なんてないと思う。むしろわたしだ  
って謝らなくちゃ。」

「そう言おうとしたら、ふと真っ直ぐに見つめられて、どきまぎし  
た。」

「…今日は、なぜ撃たなかったんだ？」

真剣な瞳で問われて、彼に出会う前に、忘れてしまおうとした暗  
い気持ちがある。

どうしていいか、わからなくなってしまったのだ。だって。  
「…怖くなっちゃったんです。ライフルに入っていたのは麻酔弾で  
すけど、でも。それがもし実弾だったらって。そう、思うと…」  
動けなくなつた。

わたしがしようとしていた行為は、模倣だ。ひとをころす。

「そうか」

スウィフトさんは、思いに沈むように、きらきらと粉砂糖をまぶ  
したみたいなのを伏せる。

ああ、やっぱり言うべきじゃなかった。

「ごめんなさい」

すごく失礼なことを口走ってしまった気がする。

「どうして謝る？」

「…その。軍人さんに言うことじゃ、ない、かと」

この人は、わたしみたいな弱い心のずっと向こうにいるはずだ。  
わたしが今日躓いたことなんて、とっくの昔に乗り越えているか  
らこそ、いまの昂然とした空気をまもっているのだろう。

自分がすごくちっぽけで、矮小なものに思えて、恥ずかしい。

「わたし、意気地がないんです。優柔不断で」

つい俯いて、指先をもじもじさせてたら、くすりと笑われてしま  
った。

「いや、人間らしいと思う」

その笑みが、なんだか悲しそうで、寂しそうで、でもまぶしくて。  
わたしはなにも応えられなくて、ただ逃げるように視線を落と  
した。

タイミングよくウェイトレスさんがトレイをもって現れてくれて、  
ほっとする。

あたたかな湯気を昇らせて運ばれてきたものは、とても懐かしい、

やさしい味だった。

噛み砕かなくても口の中でとろとろと溶けていくようにやわらかくて、するりと喉の奥に滑り落ちる。

こくと飲み込んでから、ふと首元に手をやった。嚙下と同時に痛みというほどではないけれど、鈍い違和感があったから。

指先がざらりと皮膚でないものに触れた。そうだ、絆創膏が貼ってあったんだ。

対面に座るスウィフトさんが気遣わしげな色を浮かべてわたしをみている。

ああ、飲み込みやすく喉に負担のかからない食事を、この人はわざわざ選んでここへ連れてきてくれたんだろう。

やさしい人だ。

「おいしいです」

なにも問題はない、そういう気持ちが伝わればいいと思って、わたしは笑みをつくってみせた。

「口に合って良かった。ここは食欲がない時なんかはたまに来るんだが、もしかして出身は」

「ああ、はい！ 故郷の味です。そっくりで懐かしいです」

それから、話題は故郷のことに変わっていったので、安堵したわたしはぺらぺらと、和紙が使われていて綺麗だとか、ウエイトレスさんのもつてたトレイがお盆で感激したとか、そんなことを喋って夕食の時間を過ごしたのだった。

ついでにいうと。当初の目論みは失敗した。

お店を出る前、御手洗いへいった際に、精算を済まされていたのだ。

大変スマートで、格好いいと思います。  
でも、でもね。してやられたーって、悔しく思うのは、間違っ  
ないよね。

一枚も二枚も上手で、わたしの行動なんかお見通しのうえで、さ  
らりと自然に先回りして。

∴ オトナの人って、みんなこんな感じなのかな。いままでこんな  
にかっこいい人と接したことないから、わからない。

すごく貴重な体験をしたと思う。こんなこと2度とはないだろう。  
いい夢みた。

そう思った。

5 (後書き)

乙女フィルターが次回は無いよ！

店に入った途端、小娘の様子があからさまに変わった。

しきりに周囲を見回し、インテリアのひとつひとつに目を留めてせわしなく表情を変えている。

眼下で旋毛がくるくる回ってこっちの目が回りそうだが、おい。

娘ははっと息をのんだり、感嘆の声を殺して驚き、あちこちの装飾に視線を奪われては足を度々止めた。

すぐに歩き出すから進むのにそれほど支障はなかったが、頬は紅潮し、潤んだ黒い目をめいっばい開いてちょこまか動く。どこかで見たな、こういう生物。なんだったか思い出せねえ。

テーブルについてもその様子は変わらず。

上機嫌で恍惚と、ちまちました飾りを見つめている。そこまで惹きつけられる理由がわからん。

だがメニューに目を通して浮かんだ表情に、なんとなく合点があった。

郷愁だ。

ミハル・クラタ。その名前の響きは、確かこの店で扱う料理とルーツを同じくするものだった気がする。

なるほど。

俺はうまい具合に最適な選択をしていたらしい。

これで飯の味が気に入るようなら、落とし前としちゃ不足ないだろう。

とりあえずは一番の目的のカタをつけちまおうと居住まいを直し、頭を下げる。

謝罪に対する娘の反応はいままでの遠慮がちな応答から大方予想

がついていたが、まるきり読みどおりに返された。 ……気が遠くなりそうだ。

「いいんです、わたしだって前回ハンターさんに当てちゃったし…」  
さつきまでのご機嫌な様子と打って変わってあつという間に悄気かえり、ますますちんまりして見える。

ああそうだな、当てられちゃったが故の愚行だ。わかってくれ。  
そこを相打ちだとかお互い様だとか、謝り返されたら立つ瀬がねえ。

俺は軍人、お前は民間人。元々立ち位置が違う。

弾を喰らったあたりを撫でて誤魔化しつつ、頼むから言ってくれ  
るかと祈った。何か、意識を逸らすもの……そういや。

あの時娘が撃つのを迷っていたのは何故だ。

苦し紛れの話題転換に聞けば、なんともお人好しで無防備な答え  
を自信無さ気にはぼつぼつと語った。怖かったのだと。

撃てなかったのか、撃ちたくなかったのか。どちらなのかは判別  
しかねるが。クソ真面目っつーか、素直すぎて、しなくていい苦労  
も背負い込んでそうだな、こいつ。

ただのゲームの玩具と生殺与奪の権とを重ねて握るとは。  
そうして撃たずにいた己の行動を恥じ入り、ごめんなさいと謝り  
さえして。

俺が最初に撃った時はどうだったか……覚えてねえな。それと比  
べれば、俺なんぞよりよほど人間として上等だ。

あ、やべえ。

言葉を封じるのには成功したが、肝心の娘のテンションがガタ落  
ちのまま。

なんのためにわざわざ人攫いめいた真似までして連れてきたのか。  
これでは意味がない。

泡を食う思いで活路を探し視線を泳がせ、

嫌なものに気が付いた。

娘の後ろのテーブルに座る人間が、俺を真っ直ぐ見つめている。濃艶なメイク。露出の高い服。プロポーションは官能的で、見るからにセクシャルなものを連想させる、極上の女。

…の、皮をかぶっていやがる。今のヤツを見て、誰が男だなどと思っただろうか。

クライドためえ何しにここへ来た。

殺意を込めて睨むが、堪えた様子はない。揶揄を含んでにやにやと笑っている。即刻叩き出したい。

だが俺がそう考えるのも想定の上でのあの擬装なのだろう。不用意に接触すればふざけた芝居を打たれてややこしいことになるのは目に見えている。

待てこいつだけのはずがない。

偽装にはそこそこの時間が掛かる、おそらくバッテリーが車を転がした。

さんざ人をネタに弄って酒を楽しんだのは他にもいる。

迂闊だった。娘に気を取られて周囲の警戒を怠った。

窓の外でわざとらしくチラチラと光って自己主張しているヤツがいる。

道路を挟んだ向かい側、街灯もない暗い路地。奥まったビルの非常階段踊り場。サナイこのクソ野郎。

ああ、今狙撃すんならそっからだよな、よおっく見えるだろうよ！こいつらがいるならゲンツもか。録音だの盗撮だのあの変態ぶっ殺す。

マジムカつく。

忌々しい。阿呆どもの馬鹿騒ぎに小娘を巻き込んだことになる。後ろめたい思いで盗み見れば、運ばれてきた食事を匙ですくってふうと息を吹きかけている所だった。

多数の下世話な注視などに気付くわけもない。阿呆で馬鹿でも奴らはそれで飯を食う本職だ。阿呆で馬鹿だが！

臓腑が煮えくりかえる勢いなのをどうにか押し鎮めて、娘が口に入れたものを飲み込むさまを見守った。

喉は。

多少の影響は残っているようだが、痛みを感じた様子はない。

娘はそれに言及することなく、にこりと笑って「おいしいです」と小さく言った。

何故そうも他人に気を遣うのか、甘すぎやしないかとは思ったが。阿呆と馬鹿に囲まれて荒む心情が凪いで救われる気はする。

口に合ったのならば、良かった。

それからの娘は故郷のことについて上機嫌で語りだした。この店も随分気に入らしい。

…まあここに來るときは食欲がないだのヤワイ理由ではなく、唇や顎にダメージを受けてまともに動かせねえとか、そういうのが実態だが。

わざわざ血腥いことを言って楽しげな娘の笑みに影を落とすこともないだろう。

そう思って奴等のうざったい視線は黙殺することにした。

阿呆どもは後で始末する。

「あ、の、ちょっと化粧室へ行ってきてもいいですか？」

飯を食い終えた娘が遠慮がちに声を潜めて、恥ずかしげに言うのに鷹揚に頷きかえす。慎ましいことだ。こちとら羞恥心とは無縁の生活が長すぎる。

娘が席を立ったその際に、支払いを済ませて早々に出る準備をした。これ以上見世物でいる気はない。

ついでにクライドに釘を刺しておく。

「追けてきたらどうなるかわかってるよな」

「あらコワイー。ふふ、かわいいーわねあのコー」  
殺すぞ！

とつとと店を出て駅まで小娘を送ったが、今後阿呆どもがちよっかいを出さないとは限らない。念のために連絡先を走り書いてその小さい手に押し付けた。

「何か困ったことがあったらいつでも電話してくれ。すぐ駆けつける」

少々強引なそれに、何も知らない娘が目を丸くして驚くさまに負い目を感じる。

いや、すまん俺びのつもりが面倒に巻き込んだかもしれねえ。

取り敢えずあの阿呆どもを絞めておこう。

だい、ピンチ、だとおもっ。

おさけなんてそんなに飲んだことない、もうこれ、限界、なんだ、きつと。

視界がぐるぐる回ると一緒に、自分の身体もぐらぐら揺れている気がする。

ものの遠近がよくわからなくなって、手足をあちこちにぶつけてしまったけれど、ぜんぜん痛くない。

絶対飲みすぎてる。気分が悪い。

自分が今にも意識を失いそうになっている事実には慄いた。

他の人が用事できたからって、人数合わせで変わりに参加しただけ、頼まれたから。なのに。

こんなことになるなんて思ってなかった、もう2度とこんな集まりこない！

どうにか逃げ出してきて、トイレの個室、フタが閉まったままの便座の上に座り込んで、わたしは頂垂れた。

お願い、なんて頼み込まれて断りきれずに頷いてしまった自分はなんて馬鹿だったんだろう。

あの人の噂は聞いたことがある。必ず『お持ち帰り』する人だっ。それがステータスのひとつだと勘違いしてるんじゃないの、と嘲笑われていた気がする。

みんな、知ってたんだ。数合わせじゃなくて生贄だった。やつかいなものを押し付けるためだったんだ。

最初に座らされた席の位置から考えても、意図的なものがあつた

としか思えない。

「ちょっとお、クラター？ 吐いてんのぉ？ 様子見て来いってアイツがうるさいからさぁ、早く戻ってよ」

カツコツと硬いヒールの足音を響かせながら、聞き覚えのある声の主が化粧室へ入ってきたようだった。

最悪だ。本気で狙いをつけられているみたいだし、彼女達はそれを助けようなどと思っていない。

メイクを直しているのだろう、小物を弄る音がする。

「もう、少し、したら戻ります…」

「あ、そ。どーでもいいけど飲みすぎて倒れたりしないでよねー」  
…飲みたくて飲んだんじゃないのに。

グラスを受け取らないと、持たせることを口実にあちこち触られる。それが嫌で。

そうして一度受け取ってしまうと、今度はその減り具合を理由にからまれるのだ。この手のあしらいは苦手だった。

まるく場を収めつつ拒否することがうまくできなくて、うかうかと飲まされ、この状態だ。

自力でもう逃げ出せる気がしない。

どっしりよじ。

携帯を握り締めて、頼れそうな人はいないか、友人を順番に思い浮かべる。

…駄目だ、そもそも近くに車を持つてる知人がいない。

もうこんな時間だし、いまから公共の交通機関を使ってきてもらっても、終電に間に合わない…

どじどじ。どじどじ。

…  
前にもこんなふう考えたことがあったような、気がする。

真っ白だった頭の中が、真っ白な雪のフィールドへ塗り変わって、首をゆっくり傾けてライフルをかまえる、ハンターさんが

脳裏で蜂蜜を連想させる金の髪がさらりと揺れた。

ミルクをたっぷり注いだ紅茶の香りがしそうな、日に焼けた肌の色を思い出す。

ともすれば甘くなりすぎる組み合わせの顔立ちを、ピリッと引き締める清涼な碧眼が、強い光を放ってこちらを見据えて。

そっだ、スウィフトさん。あの人なら。

困ったことがあったら、って渡してくれたメモ、確かスケジュール手帳に挟んでおいたはず。よかった、あの場所に置いておく気になれなくて、バッグも一緒にここへ持ち込んで来ている。

わたしは肩にかけっぱなしだったトートバッグを開くと、その中へ手を探り入れた。

プルタブをおこし、圧縮された空気が抜ける音をなんとはなしに聞きながら、テーブルの上に投げ置いていた雑誌に目をやった、その時だった。

携帯が震えたのは。

バイブレーションの鳴動で微かに空気が揺れている。

開けた缶ビールを一口飲み下し、ソファの背に投げたコートの胸ポケットに入れっぱなしだったそれを引き出した。

ディスプレイに表示されているのは登録された名前ではなく、数字の羅列。

見覚えは、ある。

デートのお誘いにしちやいささか非常識な時間帯だ。

まさかとは思うが、俺が非番で不在の時を狙って阿呆どもが妙な事をしてかしたのかと、嫌な考えが一瞬頭をよぎる。

どんな用件かと多少肝を冷やしつつ、持った片手でそれを開き、耳に押し当てた。

「ハロー？」

「あ！ あ、ああの、あの、わたし、せんじつごはんをこちそうにな、た、倉田…美春、くらたです」

舌っ足らずで、いろんな意味で甘口な声が耳に触れる。

まず小娘本人である事にほっとしたが、どうも呂律が怪しい。ラリってんのか。

「すいません、あの、よる、おそく……」

「いや。かまわないが、どうした？」

「ごめんなさい、ぶしつけ、で、もうしわけ、ないんですけれど、たよれるひとがほかにおもいつかなくて……」

トラブルか。

とりあえずは手にしたままだったビールの缶をテーブルに置いた。出張る事になりそうだ。

「何かあったのか」

問いただせば、以前と同じように遠慮がちな返答がかえってくる。

ロジカルとは言いがたい切れぎれの会話から推察するに、どうやら小娘は大学のコンパで飲みすぎて、一人では帰れそうにない、ということらしい。

言外に含まれたSOS、小娘が感じている脅威にも大体想像がつく。

青いのが盛って調子付く時分だ。女に無理矢理酒を飲ませて泥酔させ、己の都合のいい場所へ連れ込もうと考える屑はどこにでも湧いてでるのだろう。

お人好しでろくに嘘も吐けなさそうな甘い小娘じゃ、格好の餌食だ。

「わかった、迎えにいこう」

そう返すとあからさまにほっとした様子で礼を言われた。

声が震えている。泣き出す一歩手前って所だな、急いだほうがよさそうだ。

店名を聞き出し、すぐに行くのと伝えて通話を切った。

コートの袖に腕を通しつつ、テーブルから車のキーを拾い上げる。

さて、お姫様の救出に向かうとしよう。

一口飲んだアルコールは忘れたふりをして。

## 7 (後書き)

飲酒運転は法律で禁止されています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7272u/>

---

撃ち抜いたのは

2011年10月21日07時01分発行